さるだ学集館の外観。天然芝の整った校庭でスポーツやバーベキューなども可能

銚子スポーツタウンのサテライト施設「さるだ学集館」に「ちば銚子熱中小学校」が今秋開校

廃校をリノベーションしたスポーツ合宿施設として注目を集める銚子スポーツタウン。昨年秋に開設したサテライト施設「さるだ学集館」を舞台に、今秋から「ちば銚子熱中小学校」が開校する。現在はコロナ禍によって県外から多くの利用者を呼び込めないなか、次のステージに向けて、スポーツ以外のコンテンツづくりにも着々と取り組んでいる。

さるだ学集館の室内広場。ここで熱中小学校の講義を行う

スポーツ合宿施設で地方創生の先進事例に

JR銚子駅を出て、利根川を遡るように車を走らせること15分。初夏の勢いを感じさせるこんもりと茂った緑のなかに銚子スポーツタウンはある。敷地面積4万㎡、旧銚子西高校の跡地を活用したスポーツ・宿泊施設だ。

銚子は以前から野球が盛んである。1965（昭和40）年夏の甲子園で銚子商業のエースとして準優勝に輝き、のちにプロ野球チームのロッテなどで活躍した木樽正明氏をはじめ、数々のプロ野球選手を輩出してきた。こうした土地柄もあり、開業に際して、野球に特化したプロモーションを行い全国から関心を集めた。

同施設の最大の特徴は、両翼95m、中堅122mで外野は天然芝の野球グラウンド「くろしおかもめ球場」と昨年秋に完成した第二野球場、3階建ての体育館内にある人工芝の室内練習場や別棟の雨天練習場だ。このような充実した練習環境が高い評価を受けている。

銚子は首都圏からのアクセスもよい。そして、黒潮の恩恵を受けて、夏は涼しく、冬は暖かい気候でスポーツに適している。また、漁獲量日本一の銚子漁港のほか、農業や畜産業も盛んであり、新鮮な海・山の幸を常駐の料理人が提供することができるなどスポーツ施設以外にも多くの魅力がある。

「設備や用具の使いやすさは自分で使ってみなければわからない。ちょっとした改善点を見つけるために、私自身も利用しています」と話すのは、代表取締役を務める小倉和俊氏。木樽ドリームズ（前出の木樽正明氏が中心の地域野球チーム）を結成し、地元のスタッフたちが実際にグラウンドでプレーもしている。その時に感じた改善点を集約し、次々と新たな練習施設を整備してきた。

「毎年アトラクションを生み出してお客さんを飽きさせない東京ディズニーリゾートのように、練習環境も毎年のように拡充させていきたい」と語る。

地元・平日の利用者を開拓 総合型スポーツクラブへ

「合宿では週末や夏休みしか利用されません。残りの期間の稼働率を上げていくことが課題でした」

オープンから1年が経過し、合宿以外でいかに施設を利用してもらうかを検討してきた。その1つが子ども向けスクールだ。具体的には鹿島アントラーズ（サッカー）、千葉ジェッツふなばし（バスケットボール）、木樽ドリームズと提携し、各種スクールの会場として使用してもらうというもの。プロの技術を目の当たりにした子どもたちがそれぞれの所属チームに持ち帰ることで、地域全体の競技レベルの底上げにつなげる狙いもある。こうした取り組みによって、スポーツが日常にある「スポーツタウン」（総合型地域スポーツクラブ）の構築を目指す。こちらは6月から本格スタートした。

4月以降、緊急事態宣言の発令によって外出が制限され、4、5月の利用はゼロとなり、先の予定も含め約5000泊がキャンセルになった。夏休みの短縮も予想されるなど、コロナ禍の影響は夏までは続く。

そんななか、6月からは平日全品550円（税込）の宅配弁当の販売を開始。同施設のセールスポイントである料理を通じて、地元とのつながりを強化している。ほかにも、空きスペースのバーベキュー&キャンプ場としての利用促進や、忘年会や新年会シーズンには飲食店以外で開催されるパーティーにオードブル提供を計画している。木樽氏のプロ野球選手時代の話をまとめた書籍も制作中だ。当面、主力業務である合宿や宿泊の再開は不透明である。それでも、新型コロナ対策として打ち出された「新しい生活様式」に対処するよう前向きに取り組んでいる。

さるだ学集館の体育館。さまざまな用途に利用できる

貸し出し中のテナント

銚子スポーツタウン代表の小倉和俊氏

■会社概要

設　立	2018（平成30）年
代表者	小倉和俊
所在地	（銚子スポーツタウン） 銚子市野尻町1600 （さるだ学集館） 銚子市猿田町1179-2
事業内容	スポーツ施設、宿泊施設

（千葉銀行取引店　銚子支店）

熱中小学校での「集い」がもたらす化学反応に期待

昨年秋、サテライト施設「さるだ学集館」がオープンした。同館は銚子スポーツタウンから車で5分の旧猿田小学校をリニューアルしたもので、シェアオフィスや企業の研修、学校の吹奏楽部・書道部など文化部の活動のほか、校庭はスポーツやバーベキューなどでも使用できる。裏庭の「さるだ農園」では季節の野菜を育てており、敷地内の清掃作業は地元の障がい者就労支援施設と共同作業している。

さらに今年10月、同館を舞台に開校するのが「ちば銚子熱中小学校」だ。一般社団法人熱中学園（堀田一芙（かずふ）代表理事）と連携し、IT企業などの社長、大学教授、デザイナー、技術者などの豪華な講師陣を呼んでさまざまなトピックスの講義を半年間月1回開催し、地域の人材育成・異業種間交流などに取り組む。豊かで楽しく暮らせるまちづくりを行うことを実現するプロジェクトであり、20～80歳まで誰でも参加できる。人づくりから、地方発の新たな価値創造活動へとつなげ、講師や受講生同士の化学反応によって地元銚子を元気づける新しい事業が生まれることに期待している。将来的には、同館の教室をインキュベーションオフィスとして利用してもらいたいと考えている。

銚子市では少子高齢化が進んでおり、出生数は2009（平成21）年には359人だったが19（令和元）年には207人まで減少した。その影響は、子どものスポーツチーム減少にもじわじわと現れはじめている。何も手を打たなければ、町の活気は失われていく。銚子スポーツタウンに加え、さるだ学集館のオープンをきっかけに、地方移住を考える人を呼び込む機会としたい。

「いまはとにかく集まる人を増やすことです」と語る小倉氏も人づくりやまちおこしに情熱を注ぐ。

さるだ学集館のそばにある猿田神社に祀られている猿田彦は「みちひらき」の神として知られている。「集い」が生み出す力を信じて、銚子の新時代を拓く取り組みが続く。